

追加機能を持つ談話標識の派生

中山 仁¹⁾

The Evolution of Additive Conjuncts as Discourse Markers

Hitoshi NAKAYAMA¹⁾

I. はじめに

意味論, 語用論研究の発展にともなって, それまで周辺の言語事象として捉えられていたものの幾つかが注目を浴びようになってきた. 談話標識 (discourse markers) もその一つであり, 発話解釈に関して様々な形で重要な役割を果たすことが明らかにされてきている. 本稿では, 談話標識の中でも比較的新しい, あるいは発展途上にあると思われる例を幾つか挙げ, その派生についての妥当な説明を試みる. 談話標識をどう定義するかについては未だ議論の分かれるところであり (Schourup 1999), 定義の仕方によっては含まれる語句の種類にもずれが生じることもあるが, ここでは談話標識の範疇を確定することが中心課題ではないので, とりあえず, Swan (1995) による解説に従って議論を進める. それによれば, 談話標識とは概略, (i) 発話同士を結び発話内容の関係を明示する, (ii) 談話の構成を明示する, (iii) 発話者の意図を明示するといった機能を持つ語句を表す. たとえば, 以下の文における *anyway, anyhow, at any rate* は直前の発話内容よりもこれから話される内容の方が重要であることを含意している.

(1) I'm not sure what time I'll arrive, maybe half past seven or a quarter to eight. *Anyway/Anyhow/At any rate*, I'll certainly be there before eight o'clock. (Swan 1995; 153)

(1)の*Anyway*他は「少なくとも」に相当する意味を持ち, 直前の発話内容よりも確実な情報を導入するための標識として用いられている. このような 'dismissal of previous discourse' の用法を含め, Swanは談話標識を21種類 (その他 'focusing and linking' (e.g. with reference to, speak-

ing of, regarding etc.); 'balancing contrasting points' (e.g. on the other hand, while, whereas); 'emphasising a contrast' (e.g. however, nevertheless, mind you etc.) など) に分類して具体例の記述を行っている.

談話標識の範疇はその談話機能の側面から確定されるものなので, 統語範疇とは別のレベルに位置づけられる. しかし, 談話標識は統語範疇に属する一部の語句が本来の統語的, 意味的役割を失って, 副詞的語句や接続詞的語句に脱範疇化 (本来副詞, 接続詞であった語句も意味変化を起こす) するという一種の言語変化によって生じるものが多い. したがって, 個々の語句の脱範疇化の過程を検討することは, 談話標識の派生および今後の発展を予測する上で有意義であると思われる. 本稿では, 数ある談話標識のうちSwan (1995) の 'adding' に分類されている談話標識, すなわち, 追加機能を持つ談話標識の一部を取り上げて, その派生過程を日本語の例も考慮に入れながら検討し, より一般的な説明を試みる. これによって, 現時点で認められている談話標識のほかにも談話標識として機能している語句が存在することが明らかとなり, 談話標識の発展の方向性を知る一つの手がかりを得ることができると思われる.

なお, 比較的新しい, 発展途上にあると思われる談話標識の例としては *as well, on top, plus* などを取り上げるが, これらに関する具体例の検索は辞書記述にも頼ることが難しい「周辺の」言語現象であるため, 主に大規模コーパス (British National Corpus on CD-ROM (以下, BNC) および WordbanksOnline (= (旧) COBUILDdirect)) を利用し, 検証を行った. このことは, 主に正用法 (および誤用) を記述する辞書, および, ネイティブスピーカーの直観では把握の困難な言語現象の発見にコーパスが有用であること, また, コーパスの分析によって辞書記述の精密化が可能であることも示すことになり, 新しい

1) 福島県立医科大学看護学部 基礎部門外国語

key words: discourse markers, connectives, pragmatics, grammaticalization
キーワード: 談話標識, 連結詞, 語用論, 文法化
受付日: 2002.10.21 受理日: 2002.11.12

学問分野であるコーパス言語学の可能性の一端を示すという点でも意義深い。

II. 追加機能を持つ談話標識

1. 辞書・語法書に見られる具体例

以下はSwan(1995)が‘adding’として分類する語句と用例の一部である。

- (2) moreover; furthermore; in addition; as well as that; on top of that; another thing is; what is more; besides; in any case
- (3) a. The Prime Minister is unwilling to admit that he can ever be mistaken. *Moreover*, he is totally incapable...
- b. She borrowed my bike and never gave it back. *And as well as that / on top of that*, she broke the lawnmower and then pretended she hadn't.
- c. What are you trying to get a job as a secretary for? You'd never manage to work eight hours a day. *Besides / In any case*, you can't type.

Swanの簡単な解説によれば、これらの表現は直前の発話に対して情報あるいは意見を追加するために用いられる。すなわち、そのような表現は「これから発話を追加する」という話し手の意図を明示する機能を持つ語句であると言うことができる。これをCOBUILD²に記述されたmoreoverの例で考えてみる。(4)はCOBUILD²によるmoreoverの語義である。

- (4) You use **moreover** to introduce a piece of information that adds to or supports the previous statement.

COBUILD²ではmoreoverに「PRAGMATICS」というレベルを与えて、それが語用論的意味を持つ語句であることを明記している。ではどのような意味で語用論的なのか。COBUILD²のPRAGMATICSの解説(pp.xxxiv-xxxvii)に従えば、moreoverは‘discourse organizer’として機能していると考えられる。discourse organizerとは談話が聞き手(読み手)にとって理解しやすくなるために添えられた語句のことであり、‘signpost’や‘link word’とも呼ばれ、語句によっては話し手(書き手)の(心的)態度を表明するものもあるとしている。moreoverの場合も、話し手が次に「先行する発話に加えてまだ言いたいことがある」という話し手の意図を明示しているという意味で、話し手の心的態度が現れていると解釈できる。また、(3)の例で興味深いのは、いずれの場合も談話標識に先行する文よりも後続する文の方が深刻さを増す内容になっている。このことから、(3)のような談話標識では、

単に情報が追加されるのではなく、事態の重大さ(深刻さ)が追加されることを明示していると言える。

このように、moreoverを初めとする上記(2)の表現は単に2つの文の論理関係を表すのではなく、2つの発話同士を結ぶものであり、発話時点での発話者の心的態度を表明するために用いられているのである。

2. 統語的な接続詞と談話標識の違い

見かけは同一の語でもそれが文と関わるのか、発話と関わるのかでその性格は異なってくる。文同士の接続と発話同士の接続がどのように異なるのか、andを例に比較しておこう。(5a)のandはknowの目的語内で2つの文を並置するために用いられている。この場合、andの前後を入れ替えても全体の意味内容に変化は生じない。また、andを取り除くと文法的な文は成立しなくなる。つまり、この文のandは純粹な等位接続詞であり、統語的に義務的な要素として働いている。一方、(5b)のAndは先行する発話に対して別の話し手が質問を導入するために用いられている。つまり、Andは先行する文とは独立しており、等位接続の機能は果たしていない。質問の意味解釈上Andはなくても済む、つまり、統語上はoptionalであるが、「次に質問をしたい」という含意を持つAndを明示することによって、質問をスムーズに導入することができる。このような場合、Andは話し手の意図を含んだ語用論的な連結語、すなわち、談話標識として機能していると言える。

- (5) a. You need to know what rights you have *and* how to use them.
- b. “We’re trying to sort out our next holiday.” “*And* where’s the favourite place?” “Oh, America.”(LDOCE³)

なお、Swan(1995)には(5b)のようなandについては言及されていないが、COBUILD²によるandの当該語義(You use **and** at the beginning of a sentence to introduce something else that you want to add to what you have just said)から明らかのように、‘adding’の一例に含めることができる。

談話標識がいわゆる接続詞と区別して扱うべきであることが分かったところで、談話標識に共通する特徴を挙げ、談話標識をもう少し厳密に捉えておく。ここではSchourup(1999)が挙げている以下の7つの特徴を参考にする。

- (6) connectivity; optionality; non-truth-conditionality; weak clause association; initiality; orality; multi-categoriality

このうち、特にconnectivity, optionality, non-truth-condi-

tionalityの3つが談話標識を特徴づけるのに重要であると Schourupは考えている。実際、上で見たmoreoverやandの例もこれら3つの特徴を合わせ持っていることが分かる。ただ、Swan (1995)の解説で「談話標識は通例文頭に位置する」とあることから、initialityも重要な要素であると考えられる。しかも、談話標識は発話同士を連結するのであって、2つの文の命題内容間にあるような密接な関係を示す(特に従属)接続詞とは異なるので、先行する発話と後続する発話との間に位置することによって発話間の関係を保障するのが言語伝達上自然な形であると考えられる。また、Swanの用例を見ると、多くの場合、談話標識が独立した音調単位を持つ(あるいは談話標識の直後にコンマ・イントネーションによる区切りが存在する)ので、weak clause associationも見逃せない特徴である。おそらく、これら7つの特徴は、全て、あるいはほとんどにおいて当てはまるのが重要なのではなく、これらの特徴をより多くもつことによって談話標識としての典型性が高まると考えるのが適切であると思われる。すなわち、談話標識の範疇はプロトタイプ論的視点から捉えられるべきものであると言えよう。

談話標識の範疇の確定についてはそれ自体興味深い問題であるが、本稿の目的からそれるので、話を元に戻して、以下では上記の特徴の有無を考慮に入れつつ、追加機能を持つ談話標識の派生とその範疇の発展、拡大について検討を行なう。

3. 「追加」の意味と類義表現

追加機能を持つ談話標識の例は(2)(および(5))に挙げた通りであるが、その他、辞書や語法書からはどのような表現を挙げることができるであろうか。それには、(2)の中のいくつかの談話標識と類義関係にある表現を取り上げて、それらの表現が(6)にある談話標識の特徴を持つかどうかを検討することで程度把握できる。たとえば、moreoverの類義表現としては、furthermoreのほかにも further, additionally, alsoを挙げることができる。また、in any caseの類義表現としては(besidesの他に) anywayが挙げられる。COBUILD²によればこれらには全てPRAGMATICSのレーベルがあり、しかも、(6)の談話標識の特徴にもほぼ当てはまることは容易に判断がつくので、談話標識のさらなる例として認めることができる。さらに数種類の類語辞典を参照すると、moreoverやin additionの類語として(7)のようなものに行き当たる。

(7) too; to boot; into the bargain; added to this; to top it all (off); as well; on top; plus

これらは「追加」の意味を持つという点では類義表現

であるが、談話標識には含まれない、あるいは、典型的な談話標識とは言い難い表現であるものも含まれる。これらも同様に(6)の特徴と照らし合わせて検討してみよう。

まず、tooは談話レベルではなく、統語レベルの「追加」を表す語である。もちろん、tooの直前がコンマによって区切られることはあるが、否定の作用域に含まれることなどから分かるように、weak clause associationという特徴を持つとは言えない。したがって、tooは談話標識の範疇からは除外される。それ以外の表現は、tooとは異なりより詳細な検討が必要であると思われる。というのも、それらはtooほどは統語的に緊密な関係を持たず、いわば挿入句的に文同士の接続関係を示すので、それらがさらに発展して発話同士を結ぶ機能を持ち合わせている可能性があると考えられるからである。

tooを除いた(7)のそれぞれの表現が追加機能を持つ談話標識としての資格があるかどうかを検討する一つの方法は、これまでも行なってきたように(6)に挙げた談話標識のそれぞれの特徴の有無を確認することであるが、ここではその中でも特にweak clause associationとinitialityに注目して、それらの特徴をもつ度合いを調べ、それぞれの表現の談話標識らしさについて検討してみたい。というのも、これら2つの特徴は、それぞれ複数のテキストからなる談話同士を結ぶ談話標識の中心的な特徴であり、そのような連結は談話標識の独立性が高い場合、つまり、より談話標識らしい場合であると考えられるからである。談話標識によって結ばれる2つの発話は単一の文を指すばかりでなく、複数の文からなる一まとまりの談話である場合もあるのである。たとえば、(8)のように、談話標識によっては前の段落全体を受ける形で次の段落の冒頭部分に現れるものもある。

(8) ... He is no more mercenary than anyone else in the play. Indeed, he pursues his vendetta against Antonio not because he is out of pocket, but because he is filled with hatred. It is the same hatred in the hearts of those who treat him with contempt. Shakespeare had very little time for haters, whatever their ethnicity.

Moreover, one of the most eloquent denunciations of anti-semitism as penned by Shakespeare. We hear it in Shylock's 'If you prick us, do we not bleed?' speech. (WordbanksOnline)

つまり、当該語句が段落冒頭にあり、しかも、コンマ・イントネーションによって後続する文と音調単位の上でも独立していれば、その語句は文同士の接続機能から発展して、談話標識としての機能を果たしているという十

分な根拠を与えることになる。そして、その語句が生起する用例において、そのような場所に現れる頻度が高くなるほど、その語句が談話標識としてより典型的なものと考えられることができる。そこで、以下ではBNCおよびWordbanksOnlineのコーパスデータを利用して、(7)で挙げた(too以外の)表現の生起状況を観察し、それぞれの談話標識としての可能性について見てゆく。

Ⅲ. 談話標識への派生の可能性

1. 可能性の低いto bootとinto the bargain

一般にto bootとinto the bargainは意味上は「おまけに」に相当する語句だが、いずれもweak clause association, initialityの特徴は認められない。まず、to bootの一般的な意味と用法をCOBUILD²で確認してみる。(9)はbootの第7義、(10)がその用例である。

(9) You can say **to boot** to emphasize that you have added something else to something or to a list of things that you have just said.

- (10) a. He is making money and receiving free advertising *to boot*!
b. They have to be thin, attractive and well-dressed *to boot*.

(9)から分かるように、to bootは(i)追加機能があること、(ii)項目を並べ立てる形で使われることがあること、(iii)項目を追加した直後に現れる、という語法上の特徴を持つ。(10)の用例を見ると、いずれの場合もto bootは同一文中で、項目を追加した直後(文末)に現れる形をとっている。特に、(10b)ではthin, attractiveに続いてwell-dressedが追加されているが、これら3つの項目の接続が'thin, attractive and well-dressed'というように、一まとまりの形容詞句になっていることから、well-dressedの句内での接続が密接なことは明らかであり、したがってto bootもこの句の中に取り込まれる形でwell-dressedと結びついているのが分かる。(9)、(10)を見る限り、to bootは節との関係が強く、その位置は文末以外に考えられない。ということ、weak clause association, initialityのいずれの特徴も持つことができないということになる。もちろん、(10)だけでは検討すべき用例として不十分なので、コーパスを用いて検証してみる。すると、WordbanksOnlineとBNCのすべての用例においてto bootは文末に位置している。ただし、WordbanksOnlineにおける86例中11例、BNCにおける75例中5例でto bootの直前のコンマ・イントネーションを確認することができる。以下はBNCからの例であるが、to bootを含む追加要素(名詞句からなる文)が先行

文と独立している珍しい例と言える。

- (11) And here it is: I have proof that Neil Kinnock once spent a night of passion alone in a miner's cottage with a well-known writer. A well-known male writer, *to boot*.

このような例は(10)と比較すればto bootの文からの緊密性は緩くなるが、それでもto bootは依然として先行文内の一部、しかも文末の要素(a well-known writerの性別)に関する情報を追加しているために文末以外に置かれる可能性は残されていないようである。したがって、実例から見てもto bootが談話標識として認められる可能性は低いと言わざるをえない。

次にCOBUILD²でto bootと同義(実際には「類義」)と表示されているinto the bargainについて同様の検討を行う。COBUILD²における意味と用例の一部は以下の通り。

(12) You use **into the bargain** when mentioning an additional quantity, feature, fact, or action, to emphasize the fact that it is also involved.

- (13) a. This machine is designed to save you effort, and keep your work services tidy *into the bargain*.
b. She is rich. Now you say she is a beauty *into the bargain*.

to bootの場合と比べると、語義説明の中にリスト表示的な用法や位置に関する記述が含まれていないという点でweak clause associationの特徴を持つ傾向がやや高いと推測される。これをコーパスで検証してみる。WordbanksOnlineでは45例中43例が(13)と同様に文末で、しかも、いずれもコンマ・イントネーションは認められなかった。ただし、to bootと異なる点として、文頭に現れる例が2件あり、いずれも段落冒頭に用いられているという点が興味深い。一方、BNCでは103例中93例が文末用法で、そのうちコンマ・イントネーションの認められるものは2例であった。しかも、多くの場合、文末におけるinto the bargainによって強調されるのはto bootの場合と同様に文中の一部の要素であり、文全体ではない。なお、文頭に現れる用例は3件であるが、段落冒頭ではなかった。その他の例は文中であった。

以上より、weak clause association, initialityに関して言えば、into the bargainはto bootよりも僅かに談話標識としての発展の可能性はあると思われるが、現時点では統語レベルでの追加機能に留まっていると言えよう。

2. added to this

COBUILD²によれば、added to this [that] は以下のよう

な意味と用法を持つ。

- (14) You use **added to this** or **added to that** to introduce a fact that supports or expands what you are saying.
- (15) More than 750 commercial airliners were involved in fatal accidents last year. *Added to that* were the 1,550 smaller aircraft.

(14)の意味記述から分かることは、先のto bootおよびinto the bargainと異なり、何に対して追加されるかが、より幅を持たせた形（すなわちwhat you are saying）で表されているということである。つまり、先行文の一部の語句を指すだけでなく、先行文によって表される内容を受けることも意味する。そして、このことはthis [that]を含むことによって明示化されている。事実、(15)でもthatはmore than 750 commercial airlinersを指しているのではなく、「死亡事故を起こすこと」を指している。また、(15)の用例の特徴は、added to thatが文頭で用いられていることと、その語句の後が倒置文であるということである。ということは、added to this [that] は典型的な談話標識の場合と比べて後続部分との統語的な依存関係が強いことになるが果たしてどうなのであろうか。また、「前に言ったこと」を受けるということは、先行する発話を受けて後続する発話につなぐ機能を持つことも十分考えられる。このことをadded to thisを対象にコーパスを用いて検証してみる。この場合、「主語+be added to this」のようにaddedが純粋な受動文の過去分詞として用いられる例は除外して考える（これはBNCでもタグ付けの点で上記の場合と純粋な受動文の場合とを区別していることから妥当と言えよう）。そうすると、予想されることは、追加される要素が名詞句であれば、(15)のように‘added to this + be + NP’の形をとり、追加される要素が文（あるいは発話とも考えられる）であれば、added to thisは文頭、文中、文末のいずれかに位置するということである。WordbanksOnlineによれば、added to thisで検索した13例のうち7例が(15)と同様の形式の文、6例が文修飾的な用法であり、文頭位置であった。しかも、その6例のうち5例が‘Added to this,’という形で独立した音調単位を持っており、さらに、その5例中2例が段落冒頭に位置していた。BNCでの検索によると、該当する61のうち、(15)のタイプは32例、文修飾的用法は29例ですべて文頭位置（うち、独立の音調単位を持つ‘Added to this,’は24例で、段落冒頭は3例）であった。ここで注目すべきは、WordbanksOnlineとBNCの両者に共通して、文修飾的用法が全体のほぼ半数を占め、そのほとんどがコンマ・イントネーションによって独立の音調単位を持つ点である。weak clause associationとinitialityの観点から見てこれらは

談話標識としての機能を持つ条件を満たす。特に、段落冒頭の3例についてはその機能の発達が特に進んでいるものと言える。

したがって、added to thisに関して言えば、談話標識としての機能面の発達を見ることができるので、典型的な談話標識とは言えないにしても、その範疇に含めることが可能となる。

3. to top it all (off)

COBUILD²にはこれに関する記述がないので、コーパスからその分布状況を検証してみる。その結果、WordbanksOnlineで認められる11例中10例が文頭位置（うち、2例は段落冒頭）、しかも、そのすべてにおいてコンマ・イントネーションが存在していた。BNCでも17例中16例が文頭位置（うち、3例は段落冒頭）で、コンマ・イントネーションが存在したものは7例にのぼる。(16)はBNCからの一例である。

- (16) Dr Russell, on the other hand, was a very successful man..., and he moved in some of the highest spheres of Brisbane society. Belinda knew this because she had seen his photograph in the social pages of the newspaper more than once. She had been tempted to cut out the photographs and keep them, but she hadn't.
- And to top it all off, he was gorgeous. Or Belinda thought so, anyway.

(16)ではto top it all offは直前の文（She had been tempted to cut out the photographs and keep them, but she hadn't.）を接続するのではなく、（Dr Russell,... was a very successful manを中心とした）前段落の内容全体を受けて「その上」とつなぐ形をとっている。その他の実例などを考慮に入れてもto top it all offはmoreoverなどとほぼ同様に談話標識としての資格を十分に持っていると言える。

また、to top it all offは通例好ましくないことに関して用いるとされており、日本語の「挙句の果てに、かてて加えて」に相当する意味を持つことが多い。(16)の例からはその意味を汲み取るのが難しいかもしれないが、Belindaの境遇（上記には記述されていないが、先行文脈でBelindaは社会的・経済的にDr Russelより劣っていることが描写されている）を考えると、Dr Russelの恵まれた境遇はBelindaにとっては彼女の立場をより劣って見せる「好ましくないもの」という見方もできる。そういったDr Russelの特徴の一つをto top it all offを用いて、いわば駄目押しのように追加描写していると解釈すれば、この語句もまた否定的意味合いを持ち合わせているとすることができる。to top it all offがそれ自体（その語句を構成

する語の意味の総和)では表現しえない否定的な含意を持つということは、この語句がもはや単なる接続機能を持つ副詞的語句として存在しているではなく、談話上独立語としての資格を得るまでに発展していることを示唆している。

さらに、to top it all (off)は「…すれば」という文全体にかかって仮定を表すto不定詞句の形をとっているが、このような形で談話標識として用いられる例は他にもあり、典型的なものとしてはto tell the truthやto sum upなどが挙げられる。また、to crown (it)allは意味上も形式上もto top it all(off)と類似しており興味深い。このような背景から、この形式の談話標識はある意味で生産的であり、追加機能を持つ談話標識に限らず、その他の談話標識の発展にも関わってくるのではないと思われる。

4. as well と on top

as wellは一般にtooやalsoと同義関係にある語と見なされ、その語法上の振る舞いは特にtooと共通するところがある。たとえば、(17)のようにas wellはtooと同様に通例文末に現れる(この点についてはalsoと異なる)。また、文脈に応じて文中の様々な要素に焦点を当てることもできる(この点についてはalsoも同じ)。

- (17) We have meetings on Sundays *as well* [too]. (Swan 1995; [too] は筆者による加筆)

文末位置に現れる点についてはCOBUILD²におけるas wellの意味記述からも見出すことができる。

- (18) You use **as well** when mentioning something which happens in the same way as something else already mentioned, or which should be considered at the same time as something else already mentioned.

その他にもas wellはtooと統語上、意味上とも共通点を持ち合わせていることから、as wellは談話標識の範疇外の存在であると判断されるかもしれない。しかし、その一方で、as wellがas well asから派生した表現であることも見逃すことができない。というのも、as well as thatは(2)に示したように談話標識として位置づけられているからである。以下のCOBUILD²のas well asの意味記述では‘you want to (mention)’の部分によって話者の発話意図が表されているのが分かる。

- (19) You use **as well as** when you want to mention another item connected with the subject you are discussing.

したがって、通例as wellは談話標識としての機能は持たないと考えられているが、as well asからの派生後も談話機能が失われず、条件を整えば談話標識として機能する可能性は残っていないであろうかという疑問が生じる。その手がかりの一つはas wellが文中の一部の要素から文をつなぐ役割を担う存在へと変化する可能性についてである。このことは既にCOBUILD²の用例からうかがうことができる。

- (20) a. We'd better buy some milk, and some honey *as well*.
b. ‘What do you like about it then?’ – ‘Erm, the history, the shops – people are quite friendly *as well*.’

(20a)のas wellがsome honeyにかかるのに対し、(20b)ではpeople are quite friendlyという文にかかっている。つまり、as wellが語句と語句の連結から文同士の連結を担っている。2つの要素A, BをむすぶA as well as BがB and A as wellへと変化するすると、A, Bの対象は語句から文、さらには発話へと拡大し、それとともにas wellの生起位置も文頭に移動しやすくなるのではないだろうか。

さらに、as well asは通例in addition toと同義(COBUILD²の意味記述も全く同じ)と見なされるが、in addition to thatから派生したと考えられるin additionは(2)に見るように談話標識としての資格を持つ。それならば、as well as thatから談話標識としてのas wellへの派生も自然な過程として存在するのではないだろうか。

これをWordbanksOnlineを用いて検証すると、文末用法のas wellが9,079例存在する一方で、文頭でしかもコンマ・イントネーションの認められるas well (‘As well,’)の例が36例見られた。そのうち31例が段落冒頭に現れている。BNCからは13例が‘As well, ’の例として認められ、weak clause associationおよびinitialityの特徴を持ちうるということが分かった。以下はWordbanksOnlineのoznews (Australian news)内の一例。

- (21) Any expectation that the current series of eight tests will somehow not go ahead is overly optimistic, there did seem to be a clear undertaking that, when these tests were over next May, there would be no more.

As well, France will sign up for the Comprehensive Test Ban...

以上より、文頭のas wellの生起頻度は低いながらも存在し、機能面でも談話標識としての役割を果たしていることが分かった。

このことは談話標識に関わるより一般的な意味で有意義な結果をもたらす。すなわち、as well as thatからas well

への談話標識の派生という過程は、一般的に言えば、先行発話を受ける指示代名詞 (that) を含む談話標識がある場合、その指示代名詞が直前の前置詞 (ここではas) とともに脱落して、より単純な談話標識へと変化する過程であると言える。事実、これは(2)に示すように、as well以外にも当てはまる。

- (2) a. Instead of that, ... ⇒ Instead, ...
b. Besides that, ... ⇒ Besides, ...

興味深いことに、このことは(23)に示すように、日本語の場合にも当てはまる。しかも、日本語の場合は(23a)のように「にもかかわらず」と、通例では意味を成さない形で独立して語彙化している点も見逃せない(「にも関わらず」のように漢字を含む表現だけでなく、仮名のみ表現も多く用いられるという点も語彙化を反映していると思われる)。

- (23) a. それにも関わらず, ⇒ … φにもかかわらず, …
b. … それと同様に, … ⇒ … φと同様に, …
⇒ … φ φ同様に, …

より一般的に言えば、これらは文法化という言語変化の過程を経て文法範疇に変化が生じたのである。複合前置詞句としてのas well as NP (もちろん、それ以前に比較構文としてのas... asが位置づけられる) は指示代名詞の削除という共通の現象によって文副詞としてのas wellに変化し、さらには談話標識としてのas wellへと発展したと捉えられる。

同様に、文末で見かけるon topについても談話標識への発展の可能性を見出すことができる。COBUILD², LDOCE³などによれば、on top(of)は「複数の問題に加えてさらに問題が生じることを含意」(indicate that a particular problem in addition to a number of other problems – COBUILD²) するという。

- (24) A stepfamily faces all the problems that a normal family has, with a set of additional problems on top. (COBUILD²)

コーパスによる検証の結果、on topも先行発話を受けるthat [this] を伴って現れることが可能であり、さらに、予想通り文頭の(しかも独立した音調単位を持った) on topが生起する例を見ることができる。

- (25) Another operation was necessary when it was found a growth on my kneecap was burying into the bone.
On top of that, my knee was slightly off line. (BNC)

- (26) In 1979, the maximum a Chief Inspector could earn was 8000 pounds. Now he can expect to make more than 29000; even with inflation, an increase of more than 40 per cent. On top, he's given a 3500 housing allowance, and can look forward to a pension of up to 19500 pounds a year. (BNC)

上記いずれの例においても、「さらに問題が生じる」という含意は失われていない。(25)では「ひざに腫瘍が発見され、もう一度手術が必要である」という問題に加えて「ひざが少し利かなくなっている」という問題が重なっている状況を表している。(26)は「支給額の増大」が話題なので、一見して問題とは関わりないように思われるが、これに先行する文脈(ここでは省略)で「過剰な支給の問題」を取り上げていることから、On topは単に「手当が多い」ことを付け加えるために用いられているのではなく、「問題は他にもある」ということを示す談話標識として用いられているのである。このように、on topの含意という点から見ても、本来のon topと談話標識のon top of that, on topが別個のものであるとは考えにくいのである。

as wellにしても、on topにしてもそれが談話標識として機能する頻度は未だ低く、したがって、談話標識としての典型性という点で言えば周辺的な存在であろう。しかし、同一の派生パターンを持つ表現が複数認められることから、談話標識の発展性、あるいは生産性の一端を示す興味深い現象であると考えられる。今後このようなタイプの談話標識の分布をさらに調査することによって、談話標識の発展性だけでなく、その範疇の適切な捉え方についても有意義な結果を得ることができると思われる。

5. plus

文法化によって複合前置詞句が談話標識へと変化する現象については既に触れたが、前置詞(あるいはその他の機能語)が談話標識に変化する例は他にもある。典型的な例としては、butが元来‘outside, without, except’といった副詞あるいは前置詞から接続詞へ、さらには以下のような談話標識へと変化する現象が挙げられる。

- (27) Derek mistook the name of the company for that of a person and blurted out, “But, who is he ?” (BNC)

(27)のButはDerekの抱く意外な気持ち、戸惑いなどを表しており、論理的な対立関係を表しているのではない。butの談話標識としての用法は定着しているが、これと同様の言語変化による比較的新しいと思われる談話標識について認識することは、談話標識の発展性のもう一つの方向性を知るという意味で重要と思われる。その新しい

談話標識の一つが中山（1998）でも指摘したplusである。plusはCOBUILD²では等位接続詞として挙げられている。以下は文頭でplusが用いられる例である。

- (28) We had to have an actor who could generate real empathy.
Plus he had to carry the audience through a lot of plot.
 (COBUILD²)

上記の例の場合、plusは「さらに何か言いたい」ことを明示する談話標識として機能していると考えられる。さらに、BNCから得られた以下の例ではplusの直後にコンマ・イントネーションがあり、独立した音調単位を持つに至っている。

- (29) Chang achieved his potential fast, spotting his strengths and hitting the ball on the rise. *Plus*, Chang executed well during match play.

IV. まとめ—拡大する範疇

談話標識の範疇は統語上の制約を受けないために、比較的自由にその範疇を拡大できるものと思われる。拡大の要因としては語句の類義関係と文法化が中心に据えられるが、他の類義表現の生起状況やレジスターの違い、個々の表現の持つ含意などの関係からその存在意義が認

められた場合、新たな談話標識としての発展が可能になると考えられる。また、追加機能を持つ談話標識の場合、moreoverを典型性の度合いの高い存在、as wellなどをその度合いの低い存在と位置づけることによって、個々の談話標識の持つ意味上、語用論上の多様性と整合する形で同一範疇内に取り込むことができた。今回は追加的な機能を持つ談話標識についてのみ検討したが、このことは他の談話標識にも当てはめることも可能である。今後はより広範に談話標識の分布を調査し、典型的な談話標識と周延的なそれとの関係についてのより詳細な検討を加えたい。

参 考 文 献

- 中山 仁. 1998. 「COBUILD²における語用論情報の表示の妥当性について」『茨城工業高等専門学校研究彙報』33, 13-18.
 Quirk, R *et al.* 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
 Schiffrin, D. 1987. *Discourse Markers*. Cambridge University Press.
 Schourup, L. 1999. "Discourse Markers." *Lingua* 107, 227-265.
 Swan, M. 1995. *Practical English Usage, second edition*. Oxford University Press.
 van Dijk, T. 1979. "Pragmatic connectives." *Journal of Pragmatics* 3, 447-56.
 山梨正明. 1995. 『認知文法論』ひつじ書房.